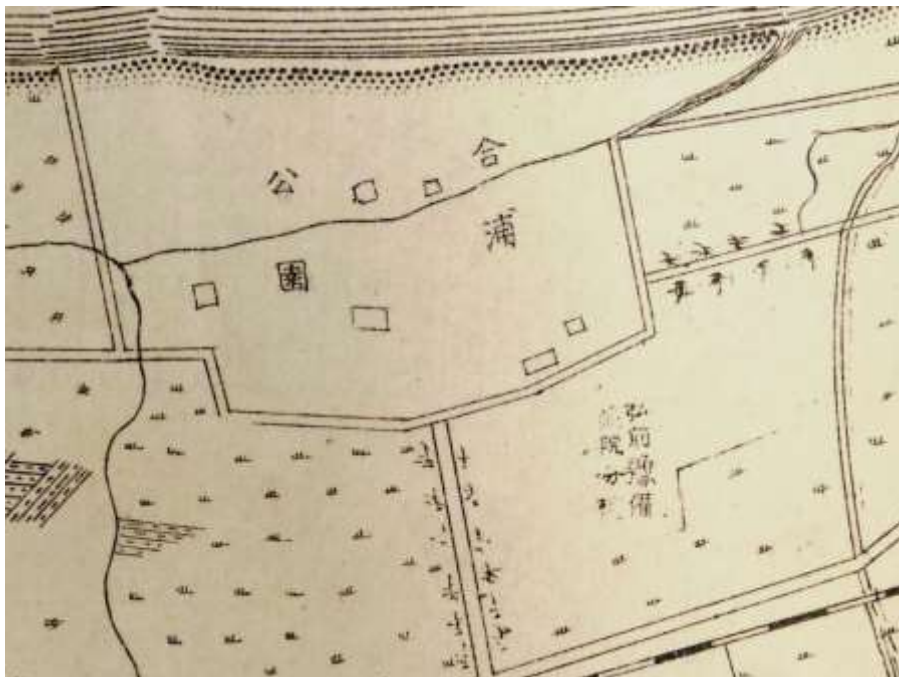


こんにちは！今回は5月12日配信の「青森開港及開市二百八十年祝賀会」の続きです。

明治39年（1906）5月20日に合浦公園で開催された祝賀会は、多くの人で賑わいました。市内は前夜より祝賀ムードで、安方町にあった日露戦争凱旋門の電飾が点され、また各町は競って町内の装飾に工夫を凝らしました。

当日、朝から続々と合浦公園に集まった来賓と会員は、控室で休憩後、市内有志による書画骨董活花などの展示を觀賞しながら開始を待ちます。やがて午前11時から屋外で記念式典が行われ、12時から宴会となりました。控室や展示場、宴会場には、日露戦争時に陸軍弘前予備病院青森分院として、現在の合浦公園多目的広場に建設された建物が使われました。



弘前予備病院分院
(明治39年「青森市全図」、歴史資料室蔵)

その後、参会者は各同業者組合が園内に用意した模擬店をめぐり、ビールやコーヒー、洋菓子や桜餅、寿司、蕎麦などを楽しみました。また、青森町の人々に敬慕されてきた藩政時代の人物落合千左衛門を題材にした芝居、剣舞や芸妓の手踊りなども演じられ、一般の人も加わり多くの人が見物しました。

一方、記念式典では子どもたちも活躍しています。市内の3年生以上の小学生2,700余人は、少年音楽隊の演奏で「青森開市開港記念市歌」を合唱し、式に光彩を添えました。この歌は筒井小学校の校歌を作詞した中里忠香と、青森県師範学校音楽教師の釜菴善作の作曲によるものです。歌詞には「海に百千の船繋り 陸に縦横汽車走る 海と陸との運輸権 共に握れる市の民は」と海陸交通の要衝となった青森市を、さらに「満韓魯領に眼を注ぎ 商機の運を制しなば」と海外貿易への期待と意気込みが歌われています。

ただ、午前8時から午後1時頃まで、強い西風の吹く中を陽射しの下に整列していた子どもたちは疲れてしまい、頭痛やめまいで救護所に連れてこられた子も多かったそうです。子どもたちにとっては全然楽しくなかったでしょうね。

シベリア鉄道の終着駅であるウラジオストク（浦塩）航路の候補地として期待され、ずっと実現を目指してきた外国貿易が可能になった青森港。当初の主な輸出品は木材やりんご、輸入品は主に石油でした。また、大正期から青森の缶詰製造が目覚ましい成長を遂げたことで、昭和戦前期には青森缶詰が世界各国に向け輸出されています。第二次世界大戦時には輸出入が途絶えてしまいましたが、戦後は大型船が接岸できる岸壁の建設や北洋漁業の再開などにより外国貿易が再興しました。



10000トン岸壁
（青森市市長公室調整課編『71 市勢要覧』）